

## 入選

### レオ君の手紙

鹿児島県 桜丘西小学校 3年 森菌 滉也

『こや君、お元気ですか。ぼくは元気でがんばっています。また、いっしょに遊ぼうね。』  
アメリカに住んでいるレオ君から手紙がとどきました。レオ君はぼくの大切な友だちです。でも、はじめはすごくきらいでした。

「はじめまして。ぼくの名前は、レオ・スワンソンです。」

レオ君は、アメリカの休みをつかって、ぼくのクラスにてん校してきました。いっしょに遊んでいてもレオ君は、ぜんぜんルールをまもりませんでした。

「レオ君、当たったら外野に行かないとだめだよ。」

「タッチされたら、おにになるんだよ。」

だから、そんなレオ君がいやでした。

「レオ君がてん校してきたけど、ぜんぜん楽しくないよ。もう、遊びたくないな。」

「もしかしてレオ君はドッジボールとか鬼ごっこをしたことがないんじゃない。だから、ルールを知らないのかもよ。」

と、お母さんは言いました。たしかにクラスでは、ふしぎなことがたくさんおこりました。

「レオ君、ほうきはよこ向きにはくんだよ。」

レオ君は、ほうきをモップのように前におしてつかっていました。

「レオ君、それはぬいちゃだめだよ。」

レオ君は、草取りのとき、花までぬいてしまいました。ぼくは、なんだかお母さんの言ったことがわかったような気がしました。おこってばかりだったぼくは、それからレオ君に少しやさしくできるようになりました。

「レオ君、ここをにぎって。ほうきはこうしてつかうんだよ。」

「レオ君、ぼくと同じようにしてみて。いっしょにやってみよう。」

レオ君は、どんどんできるようになっていました。ある日、レオ君のお母さんがぼくの家に来ました。

「こや君、レオにやさしくしてくれてありがとう。レオはさいしょ、学校のことがなにもわからなくて、すごくおちこんでいたの。でも、こや君がていねいに教えてくれたおかげで、今は楽しくてしょうがないみたい。本当にありがとう。」

ぼくは、すごくうれしくなりました。そして、さいしょおこってばかりだった自分がはずかしくなりました。ぼくとレオ君はいつもいっしょにいるようになりました。レオ君が楽しそうにしていると、ぼくも心がかかるようになっていきました。

「こや君、今までありがとう。ずっとわすれないよ。」

おわかれの日はあつというまにきました。

『レオ君、ぼくも元気だよ。また日本に来たときは遊ぼうね。大切な友だち、レオ君。』

ぼくは、レオ君にへんじのお手紙を書きました。